

所属学部：国際文化学部

学籍番号：18G1216

氏名：高木 美緒

指導教員：鈴木 靖

2021 年度法政大学国際文化学部卒業論文

## 韓国と日本のお笑い

～現役お笑い芸人へのインタビューをもとに～

## 目次

第1章 序論	2
1. 1 研究の目的	2
1. 2 研究の方法	2
第2章 イ・ウンジさんの半生	4
2. 1 お笑い芸人志望生編／お笑い芸人のなり方	5
2. 2 放送局オーディション受験生編／スタイル	9
2. 3 来日編／日本の漫才	12
2. 4 NSC 生編	14
2. 5 早稲田生編	18
2. 6 大学お笑い	21
第3章 韓国のお笑い事情と日韓の違い	24
3. 1 韓国のテレビ番組	24
3. 2 韓国の劇場	26
3. 3 韓国のお笑い芸人の活躍の場	29
3. 4 お笑いのジャンル数	31
3. 5 観客の違い	33
第4章 まとめ	35
参考文献	36

# 第1章 序論

## 1. 1 研究の目的

韓国のお笑いの現状を知りたい。お笑いという観点から日韓の違いを知りたい。日韓両国の文化を知り、相互理解を深めることに役立てたい。それがこの研究の目的である。しかし、管見の限りでは韓国のお笑い事情に関する先行研究はなく、情報も限られている。そこで、韓国人の現役お笑い芸人に直接話を聞くことで、内側から見た韓国のお笑い事情を調べることにした。

## 1. 2 研究の方法

筆者が取材を依頼したのは、イ・ウンジさんという韓国人のお笑い芸人である。

イさんは韓国の仁川の生まれ。高校を卒業した後、お笑い芸人を目指し志望生になったが、インターネットで日本の「M-1 グランプリ<sup>1</sup>」を見て感銘を受け、2008年に来日し、現在吉本興業に所属して、お笑い芸人として活動している。

筆者がイさんを知ったのはある記事がきっかけである。早稲田大学の学生部による Web マガジン『早稲田ウィークリー』に、「よしもと芸人イ・ウンジ」という見出しで、イさんの特集が掲載されていた。『早稲田ウィークリー』は、多方面で活躍している同大の生徒や卒業生の紹介をしているマガジンであり、イさんは教育学部在学中にこのマガジンの取材を受けていた。この記事を読み、イさんが韓国と日本の両国で活動の経験があることを知り、イさんに話を聞くことができれば、内側から見た韓国のお笑い事情や、日本と韓国のお笑いの違いを知ることができるのではないかと考え、取材を申し入れた。

筆者は取材のアポイントをとるため、まずイさんの SNS をネットで調べた。すると、イさんがインスタグラムを使っていることが分かったため、筆者はインスタグラムのダイレクトメッセージで、今回、「日本と韓国のお笑い」というテーマで大学の卒業論文を書こうとしていると研究の趣旨を説明し、取材の依頼をした。すると、2日後、イさんから、

私が大学時代にレポートや論文で書こうとしていたテーマと一致している部分があって、かなり興味を持っているテーマです。日本に来る前から色々と考えてきたのはありますが、私の経験で役に立つ部分があるといいですね。協力しますので、お願いいたします。

と返信がきた。そこからメッセージを重ね、2021年12月2日、高田馬場のレンタル会議

---

<sup>1</sup> 吉本興業と朝日放送テレビが主催する日本一の若手漫才師を決める大会。出場できるのは、2人以上で、結成15年以内の漫才師。プロ・アマ、所属事務所の有無は問われない。優勝者には100万円の賞金が与えられる。2021年大会には6017組の漫才師がエントリーした。

室にて取材をさせていただくことに決まった。

インタビューに備え、筆者は、イさんの年譜を作成した。この年譜をもとに、これまでのご経歴や韓国のお笑い事情、実際に感じる日韓の違いについて、質問を用意した。

実際に取材でお会いした時に、イさんはまず韓国のお菓子とバックをプレゼントしてくださった。メッセージ上でしか話したことのないお相手に、慣れない取材をするということで緊張していた筆者だったが、このお気遣いのおかげでかなり心和むことができた。

インタビューが始まると、当時のストーリーをすらすらとお話してくださり、筆者も一緒になって感情移入しやすく、楽しくお話を伺うことができた。また、韓国と日本、両国で活動した経験のあるイさんだからこそその視点でお話を聞くことができ、貴重な経験を得ることができた。

取材後、この論文を執筆するにあたって確認したいことが生じた際も、筆者がメッセージを送ると、丁寧に対応してくださった。本稿を始めるに当たり、改めて感謝の意を表したい。

## 第2章 イ・ウンジさんの半生

この章では、今回のインタビューであるイ・ウンジさんがどのような人物なのか示すべく、イさんの経歴について紹介していく。と同時に、そこから見えてきた韓国のお笑い事情もあわせて紹介していきたい。

以下、インタビューの前に筆者が作成した、イさんの年譜に沿って進めていこうと思う。

西暦	年齢	事項
1985	0歳	8月17日、韓国、仁川に生まれる
2004	19歳	高校卒業後、お笑い番組専門の劇場で志望生になる
2008	23歳	9月、日本で生活をはじめ
2008～2010	23～25歳	日本語学校に通う
2010～2011	25～26歳	NSCに通う（東京NSC16期生）
2010	25歳	7月、ウリというコンビを結成（コンビ時代は主に漫才）
2013	28歳	12月、コンビを解散（解散後はピン）
2013	28歳	受験勉強スタート（専門学校の留学生コースに通う）
2015	30歳	4月、早稲田大学入学（サークル「お笑い工房LUDO」に入る）
2019	34歳	3月、早稲田大学卒業
2019	34歳	4月、早稲田大学大学院進学
2020	35歳	2月、すまいるJKを結成

## 2. 1 お笑い芸人志望生編／お笑い芸人のなり方

イさんへ取材するにあたって、まずお笑い芸人を目指した始まりのところから尋ねることにした。

問：お笑い芸人になろうと思ったきっかけは何ですか？

韓国で最初お笑い芸人になろうと思ったのは、子供の時は結構家庭環境があんまりよくなかったんで、どういう風に良くなかったって言ったら、まあ、生まれて数か月で両親が離婚されて、お母さんはどっか行ったんで、お母さんの存在もそんなに知らずに育って、で、お父さんも5歳の時に再婚されて。再婚された方のほうに行っちゃったんですよ。それで、おばあちゃんが育ててくれたんですけど、まあ、伯父がいて、お父さんの末っ子の弟がいたんですけど、小学校1年生くらいの時からアルコール中毒になって、毎晩騒いすごい、なんか、結構、あの説明しにくいけどやばい状態が続いて、例えば私は別に嘘とかついてないのに、呼ばれて、ずっと「お前は嘘をついてる」みたいなことをめっちゃ聞かされたりとか、大声でずっと叫んでるので、それを毎晩聞くようなのが、ずっと小学校1年生くらいから大人になるまで、大人になってからもまだちょっと続いているんですけど、まあ、でも私は今日本にいますので、で、とか、まあ家に借金がすごいあったりとか、色んな状況が重なって、あんまり家庭環境的には良い環境ではなかったんですよ。だから、段々もう、小学生の時はまだ明るいといっても、もう中学校、高校生になるにつれて暗くなっていくわけなんですよ。

しかし、この後、偶然テレビでお笑い番組の再放送を見たことをきっかけに、お笑いライブを見に行くようになったそう。

高校3年生の夏休みに偶然テレビ番組みてたら、テレビで、『ギャグコンサート』っていうすごい長寿の、今はなくなったんですけど、有名なお笑い番組があって、その再放送をずっとやってたんですよ、テレビで。で、それを見てたら、なんかめっちゃめっちゃ面白い方がでて、私的に。それを見て、「この人たち、こんなに面白いんだ」と思ってみてたら、すごい楽しかったんで、「あ、めっちゃいいな」って。そこから、高校3年生の秋くらいから、韓国のお笑いライブを見にいったりしたんですよ。それで、見に行ったり。韓国の放送局のお笑い番組って公開コメディなので、誰でも申請して、もし抽選で当たれば見に行けるんです。

毎週のようにライブを見に行くうちに、お笑い芸人に対して尊敬の気持ちを持つようになった。と同時に、「自分もお笑い芸人になって人を笑わせられるだろうか」とも考えた

が、当時はまだ自信がなかったという。

見に行っているうちに、やっぱり面白いものって伝わってくるじゃないですか。こんだけすごい、その現場にいる人たちをこんだけ笑わせられる人たちってすごいなって、段々もう尊敬の気持ちに変わっていくんですよね。それで、「私もこういうことできるかな」って少し思ったりしたんですけど、でも当時は「できるわけないだろう」っていう気持ちの方が大きかったんですよ。やっぱり、性格が暗くなっていて、クラスにも友達がほぼいないみたいな感じだったんで。

そんな中、イさんの姉が突然「お笑い芸人になりたい」と言い出した。

うちの姉はそういう家庭環境でも私とは性格が真逆で、中学校の頃からダンスやったりして、ダンス系を結構やってきたんですよ。だから舞台には立ってて。そしたら、うちの姉が突然「お笑い芸人になりたい」と言い始めて。で、（姉が）一緒に仕事してた芸人さんが所属する劇場が、新しく誕生したんです。それで、初めてのお笑い芸人の志望生を集める、みたいな告知があって、で、すぐにうちの姉に「じゃあ、そこに入ったらどう？」って言ったんですよ。

姉の劇場オーディション。それはイさんにとっても、大きな意味を持つものになった。

姉が行くことになっているのに、何故か私がすごい眠れなくて、朝まで眠れなかったんです。（眠れなかったのは）たぶん私も行くかどうかを悩んだんですね。どうしようどうしようって思って、当時高校卒業して就職したんですけど、もう会社休むって言ってついて行ったんです。私もついて行くって。で、ついて行って、その『ギャグコンサート』に出ている有名な芸人さんたちが座っている中で、その2人がここの志望生になりたいって来たぞってなったんです。私も行って、私もなりたいてすって言い始めたんで、2人になっちゃって。最初、（申し込みの）電話では1人だったんですけど、もうついて行ったからにはやりませ、みたいに言って。それで会社辞めました、すぐに。それがきっかけ。なんか変な感じですけど。

このように、イさんの芸人人生は、姉のオーディションについて行ったことがきっかけになり始まった。仕事を辞めて、自分にはできるわけがないと思っていたお笑い芸人、尊敬の念を抱いていたお笑い芸人への道に進むことになった。

このオーディションのようすについて質問してみた。

問：実際のオーディションはどうでしたか？

姉妹2人で（ネタを）用意をするわけですよ。でも、もうめっちゃ駄目で。だって作ったことない人がいきなりネタを作って、見せたりしたことない人が、人前で何か見せるって、相当ハードルが高くて。何かを見て、こういう風に作るってわかっていればいいんですけど、まだ何もわかっていないから。それで一瞬やったんですけど、私本当に声が出せなくて、小さくて、緊張しながらやっちゃって。

ダンスをしていた姉とは違って、舞台に立ったことがないイさんは、審査員に厳しい批評をされた後、こう言われたという。

私は「街中にいる誰を連れてきてもお前よりは面白い、お前よりはできる」ってすごいはっきり言われて。でも、「お前のような人を昔見たことがあるけど、その子も劇場入って、ちゃんと芸人になって、今じゃ誰よりも前説とか、すごく上手く面白くやるし、ネタも作れる人になったから、まあやってみろ」みたいな感じで受け入れてくれたんですよ。

こうして、イさんは劇場に所属するお笑い芸人志望生となった。「お笑い芸人志望生」と表現からも分かるように、韓国では、正式なお笑い芸人になるために、いくつかステップがある。

まずイさんのように、志望生として劇場で舞台に立ち、経験を積む。

そして次のステップは、放送局所属の芸人になる。こうなると正式なお笑い芸人だ。しかし、そのオーディションに合格するのはかなり厳しいとイさんは言う。

韓国の場合はお笑いの試験があるんです。放送局の芸人になるので、1年に1回ぐらい、局の芸人になるための公開募集の試験みたいなのがあるんですよ。試験っていうか、オーディションなんですけど、一応試験って言い方にしているんですよ。会社の入社試験みたいな、そういう形をとっているんです。」

オーディションは公開募集で年に1回ほどしか開催されない上に、人気のある放送局の場合、年に1000～2000人の志望生が受けて、合格するのは10人ほどだという。

だから正式に芸人になるのがすごい厳しくて。日本より「お笑い芸人です」って名乗れる人は圧倒的に少ないと思います。日本は逆になるのは簡単なので、自分お笑い芸人ですって名乗れる人はめちゃくちゃ多いんですよ。一方で、劇場で実際に舞台にも立っていても韓国では志望生という立場なんです。放送局のオーディションで受かってないので、立場的には正式に芸人になってない状態なんで

す。

この放送局所属の芸人というシステムについて質問してみた。

問：放送局の社員のような扱いになるのですか？

いったんそうなんです。2年間とか契約を結んで、本当に局の社員みたいな。放送局の芸人として所属している間は他の放送局の番組には出られないんです。その代わりに、給料とかは保障してくれるんです。月々最低いくらはもらえとか、1個の番組の出演料とかも悪くない感じで。そこが日本とは違うんです。日本は給料の保障とかはないので。

問：契約終了後はどうなるのですか？

2年たったら、フリーにして、他の事務所所属とかに変えられるんです。そこからは他の放送局の番組も出られるんです。

このように、韓国で放送局の芸人になると、契約している期間は他の放送局の番組には出られないが、給料面の保障は日本の事務所に比べるとしっかりしている。契約が終了すると他の事務所などに所属したり、他の放送局の番組に出演したりできるようになる。

このような韓国のお笑い芸人の仕組みは、日本のアナウンサーの仕組みと似ていると、イさんは言う。韓国では、例えば「日本のフジテレビアナウンサー〇〇さん」のように、「SBS<sup>2</sup>の芸人〇〇さん」という形で、世の中に知られる。

以上のように、韓国でお笑い芸人になるには、志望生として劇場に出て経験を積み、放送局のオーディションという狭き門を通りぬけ、その放送局の社員になる必要があることが分かった。これは、日本でのお笑い芸人のなり方とはかなり異なる。日本での代表的な方法は、養成所に入る・芸能事務所に入る・お笑い芸人に弟子入りする・独学でネタオーディションに応募するの4パターンである。今回のインタビュー、イさんはというと、来日後、養成所に入るという選択肢をとり、そしてお笑い芸人になった。

---

<sup>2</sup> 韓国の放送局。

## 2. 2 放送局オーディション受験生編／スタイル

韓国で劇場に所属していた時の活動について聞いてみた。

問：その劇場に所属していた時はどのような活動をされていたのですか？

その劇場に在籍期間は2年で、実質いたのは1年半ぐらいなんです。途中で半年くらい休んでた時期があって、で、その間にいろんなことがあって。まあ私最初からできないから、最初から舞台に立てるわけがないんですよ。だから、他の人よりも裏の仕事をすごいさせられて。できる人はもっと早く舞台に立たせてくれるんですけど、そういう立場じゃないので、徐々に出していくみたいな感じで、やってもちよい役ですし。

「街中にいる誰を連れてきてもあなたよりは面白い」と言われて入った劇場では、最初から舞台には立てず、裏の仕事をさせられていた。年に1回の放送局オーディションを受けるが、舞台に立った経験があまりないイさんは結果を出すことができなかった。

オーディションを受けても全部落ちるし、やっぱり舞台にたくさん立ってないから、他の人よりは。上手い人はもっともっとうまくなれるんです。たてばたつほどうまくなるもんだし、もっと考えるもんじゃないですか。でも、やっぱり立ってない人はどんどんどん、他の人よりは実力が上手くはなっていないですよ。これは、日本のお笑いでも同じだと思うんですけど、だから上手い人はずっと出てるし、ずっとうまいんですけど、できない人はそこで何か1個見つけない限り、結構厳しかったりするんですね。

2006年、イさんは2年間所属していた劇場を辞めた。そのころ、同じ劇場を辞めた友達から一緒にSBSのオーディションを受けよう誘われ、2人でコントを作り受けました。すると、1次選考は通り、2次選考に進んだ。2次選考が受かれば次の選考はほぼ受かるため、ここが実質、最終選考だった。

そこが最終みたいな感じだったんですけど、2人一緒にコント作って、一緒に受けたのに、その友達だけ受かったんです。で、私は落ちて。結構チャンスだったじゃないですか。結構、（受かる人数が）狭くなってここで受かればいけるかもなのに落ちたので、めちゃくちゃ落ち込むわけなんですね。

正式なお笑い芸人になれるかと思ったが、結果は落選。しかし、一緒にコントを作った友達は合格した。

ここに、韓国と日本のお笑いの大きな違いが見られる。韓国ではお笑い芸人は1人1人で活動する。日本のような固定のコンビやトリオという概念がほぼ存在しないのだ。

問：韓国には固定のお笑いコンビ、トリオはいないのですか？

固定のコンビとかはいないです。たまにいるんですけど、自分のトリオみたいなものを作って。でも別に、だからといってその人たちだけでネタをやるわけではないです。

問：それでは、2人だけでネタをやるということはないのですか？

そうですね、この人とだけずっとやるみたいなのはいいです。日本はコンビ、トリオがパッケージ化、ブランド化するじゃないですか。そういうブランド化、パッケージ化は本当にたまにいるけど、ほとんどないです。なので、韓国でお笑い芸人は個人名で活動します。

問：韓国にも、なかには固定のコンビやトリオを組んでいる人もいるのですか？

オンダルセム（옹달샘）というトリオがいます。この人たちは3人で一緒にKBSの試験を受けて、3人で一緒に受かったんです。前からオンダルセムっていう名前です、大学の同期でずっとやってきたけど、別にこの人たちも他の人と全然ユニットコントめっちゃやってるので。でも韓国ではこういう（固定のメンバーでやってる）人たちは珍しいですね。

問：固定のコンビ、トリオを組まないは何故でしょうか？

仕組みじゃないですか。放送局のオーディションでは1人1人が受かる形になっているから、コンビとかトリオとかそういう形をとるっていう考えはなかったんじゃないですか。一応、放送局の社員みたいな感じで所属してしまうわけですから、それを全部コンビとかにしたら、片方の人は気にいってないのに受からせるとかはないじゃないですか。私が（SBSのオーディションに）落ちたっていうのも、2人で一緒に受けてるけど、私は落ちて、その子は同じコントと一緒にやっても受かりましたよね。

以上のように、日本と韓国では、お笑い芸人の活動スタイルも異なることが分かる。固定のコンビやトリオを組み、それがあつ種ブランド化している日本。個人で活動している人たちが集まり、不特定の人とネタを披露するスタイルが主な韓国。この違いは、お笑い

の発展の仕方の違いが関係していると、イさんは言う。

お笑いの発展にも関わると思います。日本の場合は漫才っていうのが長い時間をかけて発達したんだと思うんですけど、漫才っていうのは1人でできる形ではないですね。必ず2人以上はいないといけない。固定のコンビとかがないとやりづらいですね。韓国にも、2人で立って掛け合いでやるネタはあるんですよ。あるんですけど、でもそれだけじゃなくて、ユニットコントでいろんな人をまぜてやるようなネタの方式が流行ったわけですから。そうになると、誰かを固定でずっとやるっていう概念はなくなりますよね。

## 2. 3 来日編／日本の漫才

2004年から韓国でお笑い芸人志望生として活動していたイさんは、2008年、日本にやってくる。そのきっかけについて尋ねてみた。

問：日本に行こうと思ったきっかけは何だったのですか？

これは私が（放送局オーディションに）失敗してすごく落ち込んでいた時期でした。今後どうしようか、韓国でずっと試験を受けていくのか、韓国で目指すのか、諦めるかって悩む時期にもなったんですね。今までより良いところまでいったのに、こう失敗しちゃったから。

一方、イさんはもともと日本の文化に興味があったという。

私結構子供の時から、日本の大衆文化が好きで、例えばアニメ、コスプレ、ゲームとか J-pop とか、中学校の時から J-pop すごい聞いてたんです。で、日本にはすごい興味があったんですけど、日本のお笑いどうなのとか見たことがなかったんですよ。で、その頃に日本語を学ぼうという気持ちになり始めて、それが2007年の夏くらいなんですけど、まだ本格的に学びはしなくて。

そこで、見たのが M-1 グランプリだったという。

その時に見たのが M-1 グランプリのチュートリアルさんの「チリンチリン盗まれた」っていう漫才なんです。それとあとは、「嵐の宿題くん」に鈴木杏さんがでて、鈴木杏さんがお笑い好きで、お笑い芸人を集めて、杏一グランプリをするみたいな企画があつて。当時、無限大<sup>3</sup>とかに出てらっしゃった当時の若手芸人さんたちがみんな出たんですよ。たしかハイキングウォーキングさんとコンマニセンチさんとかタカダ・コーポレーションさんとかそのあたりだと思うんですね。今は解散された方もいらっしゃったりはするんですけど。

M-1 グランプリを通じて、韓国のお笑いとの雰囲気の違いを感じ、興味がわいたイさんは、そこに登場していた芸人が養成学校の出身だと知り、自分も日本の養成学校に入学しようと、本格的に日本語の勉強を始めたという。

日本のお笑いを見て、「あ、日本のお笑い芸人さん、こんな感じでやってるん

---

<sup>3</sup> 吉本興業が運営する渋谷の劇場。

だ」っていうのを見て興味がすごいわいてきて、なんか韓国とちょっと雰囲気違  
うなって、その時気付いたんですね。特に M-1 グランプリとか漫才、マイク 1 本  
置いて 2 人で掛け合いでやってるのが、韓国だともう今はほぼ見ない形ですから。  
昔だとあったかもなんですけど、今は 2 人とかで立ってそうやるのがないので。  
で、調べてみたら、チュートリアルの徳井さんが<sup>4</sup>NSC 出身っていうのが分かっ  
たんです。じゃあ私もここ (NSC) に行くべきだって、その時思ったので、日本  
語を本格的に学ぼうってそこで思ったんですね。

イさんは、自身の YouTube チャンネル<sup>5</sup>でも「日本に来たのは、お笑い芸人になって漫  
才をするため」と話しているように、特に日本の漫才に興味を持ったという。これは、現  
在の韓国で漫才のような形がないということも大きい。韓国のお笑いの主流はユニットコ  
ント。マイクを 1 本置いて掛け合いによって笑わせる漫才という日本のスタイルは、イさ  
んにとって新鮮なものだったようだ。

---

<sup>4</sup> 吉本総合芸能学院。吉本興業が運営する日本最大規模のお笑い養成所。

<sup>5</sup> 「ウンちゃんねる」という YouTube チャンネル。2020 年 1 月 16 日に投稿された「You 何しに日本  
へ？ 韓国人の私が 11 年前に日本に来た理由！」という動画で、このように話していた。

## 2. 4 NSC 生編

2010年、イさんは25歳で、東京校16期生として、念願のNSCに入る。まず、ここに至るまでについていくつか質問してみた。

問：NSCは大阪校と東京校がありますが（エリア校として札幌、名古屋、広島、福岡、沖縄にもある）、東京を選んだのは何故ですか？

大阪にするか東京にするか悩みました。大阪ってやっぱり関西弁が面白いから、関西弁を身につけたほうがいいんじゃないかっていう考えもあったんですけど、でも結局大阪の芸人さんも最終的には東京に進出する方が多いじゃないですか。その過程は省いた方がいいなって思ったんで。全国区で考えたら、東京にいた方が（良い）。

一方、言葉で人を笑わせる漫才をするにあたって、関西弁に対して思うこともあるという。

でも今になってやっぱり関西弁に身につけた方が面白かったかなってというのは、芸人になってちょっと思いますね。そっちの方が絶対面白かったかもしれないです。関西弁しゃべってる韓国人みたいな。だからBIGBANG<sup>6</sup>のスニリとかも完全に関西弁で日本語覚えて。関西弁ってイントネーションが東京より結構激しいから、外国人が習得しやすいと思うんですよ。で、関西弁しゃべっていると、内容がどうであれうまく聞こえるんです、外国人は。日本語がすごいまいなって。東京の標準語って、外国人が標準語をうまくみせるってほぼないと思うんです。よっぽどセンスがない限りは。でもまあだからこそなまっているのが特徴になるのはあるんですけど。でも関西弁できたら面白かったかもっていうのはあります。

問：吉本興業以外の事務所という選択肢はなかったですか？

たぶん最初だったからそこまで分かっていなくて、見た芸人さん全員、「嵐の宿題くん」の）杏-1グランプリに出た芸人さんも全員吉本興業で、チュートリアルさんも吉本興業で、結構直近のM-1グランプリで優勝された方、みんな吉本興業だったりして。ブラックマヨネーズさんとか。調べたバラエティー番組に出てる芸人さんがほぼ吉本興業の芸人さんだったんですよ、たまたま。

---

<sup>6</sup> 韓国の男性アーティストグループ。スニリはメンバーの1人。流暢な関西弁を話すことで有名。

今は他の事務所の芸人も目立つようになったが、当時、韓国にいたイさんにとって吉本興業の印象が強かったようだ。

最近になると、ワタナベエンターテインメントの方とか他の事務所もすごい目立ってるんですけど、当時はやっぱり1番目立つ芸人さんたちがほとんどが吉本興業で、ダウタウンさんもさんまさんも吉本興業。日本のお笑い芸人さんてほぼ吉本興業にいるなっていう印象がすごい強くて。あと、NSCに入って無事に卒業出来たら、吉本興業に入れるっていうのがあったから、日本に来る前は吉本興業だけ見てたんです。吉本興業に入るっていうことが夢、目標だと思って、日本に行こうって思ったんです。

NSCを卒業し吉本興業に入ることを夢見て、日本にやってきたイさん。しかし、NSCに入ろうとしていた頃、少しの迷いがあったという。

でも正直、いざNSCに入ろうとした年に悩みはあったんです。それは、ワタナベエンターテインメントに行くか、吉本興業に行くかっていう。（ワタナベエンターテインメントがやっている）ワタナベコマメディスクールか、NSCか。めちゃ揺れたっていうわけではないんですけど、ちょっと迷いました。というのも、ワタナベコマメディスクールのオーディションっていうか、面接みたいなのがあって、そこに行って、ちょっとした奨学金もらえるような、それにも選ばれたので、どちらに行くか悩んだんですね。

当時の相談相手は姉だった。韓国の劇場のオーディションと一緒に受かった姉は、イさんと違って、劇場を早々に辞めたという。

姉は劇場に入って3か月で辞めました。むしろ私よりできるって言われてた姉の方が早く辞めたんですよ。姉は現実的なので、ここ（劇場）でこれ（お笑い）を永遠にやっても難しいって判断したんだと思います。たぶん続けていけば姉はできたかもなんですけど、もっと早くお金を稼ぎたいみたいな思考に走ったんです。

イさんが日本語を勉強していることに対して、現実的な姉はこう言っていたそうだ。

最初は姉に理由を説明していなかったのですが、「なんで日本語勉強してるの？時間がもったいないじゃん、それ以外に他のことやりなよ。お金になりそうなことやりなよ」って超言われてたんですけど、日本に来る前に。理由を説明しないから、姉も納得しなかったと思うんですけど。

しかし、日本語を勉強する理由を話すと激励してくれたという。

「私吉本興業っていう日本の事務所に入りたくて、日本でお笑い芸人になろうって決めたから、だから日本語学び始めた」って言ったら、態度が変わりました。「なら頑張れや、もっと頑張れや」みたいな。たぶんこの考えが良いと思ったのかもしれないですね。

イさんは、どの事務所にしようか迷った時も、夢を応援してくれている姉に相談したという。

ワタナベコメディスクールに行くか、NSCに行くか悩んだときに、姉に言ったんですよ。ワタナベコメディスクールのオーディションに行ってきたことも話しました。そしたら、「最初から吉本興業行くって決めてたのに、そこから変えるのはおかしくない？」みたいな。で、「吉本が今日本で1番大きいって言ってたでしょ？なら吉本でしょ。」って言われて。

こう言われたイさんは、日本に行くことを決めた時の初心を思い出し、NSC に入ることにした。

私自身も、尊敬してる先輩とか1番見てきた人が誰かとか、総合的に考えたときに、やっぱり吉本の先輩方を見て決めたから、そりゃそうだよなって思い出して。

実際に NSC に入った後のようすを尋ねてみた。

問：NSC はどうでしたか？授業などは予想通りでしたか？

全然予想とは違いました。ダンスの授業も結構あるし、演技の授業もあるし、ボイストレーニングもあるし、なぜかカンフーとかもやるし、着物の着付けみたいなのをやる授業もあるし、なんかよく分からない授業が多くて、なんだこれはってちょっと思ったりもしました。

直接お笑いに関わる授業も意外なものだったという。

お笑いの的なのは、ネタを見せて作家さんにダメ出しを受けるみたいな感じで、同じクラスの子たちを作家さんと一緒に見て、それが一個終わって、作家さんが

ダメ出しをするのを見るみたいなの。なので、人を見て学ぶって感じ。あと、自分が作って見せて話を聞くって感じだったんですけど、そういう感じだとは思ってなかったんですよね。作り方を教えてもらうとは思ってたんですけど、ネタを見てもらう、たしかに（授業のスタイルが）そうなるって後で納得はするんですけど、初めはそういう形だっというのはわかってなかったんで。

1年間所属した NSC。養成所のスクール生という立ち位置だが、すでに競争は始まっていたという。

NSC 入ってみたら、選抜っていうのがあります。講師の作家さんがいっぱいいるじゃないですか。その人たちが、自分が見て良いと思った人たちを集めて別のクラスで授業をする選抜っていうのが半年以降くらいからあるんですよ。で、ここに入った人はやっぱり社員さんから覚えられたり、目つけられたりします。で、当時「up!up!」っていうライブがあるんですけど、そこに出られるのも、今月は誰々さんの選抜の子みたいな感じなんです。だから、結構そこで社員さんが目をつけるので、出発の時点から差が出るんです。そういうところで目立たないと出発が遅れるんですよ。みんながよく劇場とかで見るような芸人はここで既に作られてるんです。

さらに言うと、NSC に入る前に、大学などでお笑いをやってきた人はより有利だという。

大学お笑いとか、外でお笑いやってきた人が有利ではあるんです。ネタ作りとか見せ方とかすでにうまくなってる状態なので、（NSC の）選抜とかに入りやすいじゃないですか。だからそういう人は、卒業ライブとかでトップにもなりやすいし。だから今の現状を見ると、結構近い期の人で上にいる子は大学お笑いとか出身が多いんです。芸歴1年目っていうけど、本当に1年目なのかっていう人たち。だって大学で4年とかじゃないですか。スタートがNSCっていう人とは差が大きいです。

こうして、NSC に入って日本でお笑いをするという夢をかなえたイさん。NSC 在学中は、ウリというコンビを組み、漫才をしていたという。現在は、また別のコンビ「すまいる JK」として活躍している。

## 2. 5 早稲田生編

2015年、イさんは30歳で早稲田大学教育学部に入学する。高校時代までちゃんと勉強してこなかった分、受験勉強を始めると新しい学びが多く、大学に行きたいと思うようになったという。その決断に至るまで経緯について尋ねてみた。

問：数ある大学の中から早稲田大学を選んだのは何故ですか？

受験勉強を始めたときに、今田（耕司）さんとかのマネージャーをやっていた吉本（興業）の方と、2人でごはんに行ったときに、「大学行くの本当に良いと思います」って言われて、「でもせっかく行くなら早稲田か慶應には入ってほしいです。それくらい入らないと、肩書きとか話題とかにしにくいから、行くならそれくらい、それ以上目指してください。」って言われて、そっかやっぱり早稲田なのかって。

問：どのくらい受験勉強されたのですか？

約2年くらい。2年もかからなかったですね。1年半くらい。2013年4月からちゃんとした受験勉強をスタートして、2014年の9月に受かっているの。早稲田が1番受験日が早いんですよ、外国人の受験で。

問：早稲田大学の中でも教育学部を選んだのはどうしてですか？

私が入った学科は生涯教育学専修なんですけど、生涯学習って、自発的、自主的ところがすごいポイントなんです。なので、学部や専攻について考えたときに、私自身がやっても生涯学習だと思ってました。

イさんは、これまでの自分の選択を振り返り、生涯教育学のテーマと重なる部分を感じたという。

私ほんとに高校までは家庭環境がああいう感じで暗い性格で、学校でずっと寝てたりして勉強もしなくて、成績も結構後ろの方で、本来なら早稲田とかに入れるような学力を持ってないんですよ。でも、大学に入るという目標が1個できて、これは誰かによってじゃなくて、自分から発生したものじゃないですか。自主的じゃないですか。振り返ると、日本でお笑いをやるために日本語を学んだのも、大学に行くために勉強したっていうのも、大人になってから自発的に生じた意欲。これって生涯学習的な考えだなと思いました。

問：大学に入り、どのような研究をされたのですか？

結構幅広く専攻していました。副専攻も4つくらいあって、ジャーナリズムと日本語教育学研究もやりましたし、コリア研究という朝鮮半島を研究するのもやりましたし、社会貢献とボランティアっていうのもとったんですよ。教育学部だったんですけど、教育学部の建物じゃなくて他の学部のところにめっちゃ行ってたんです。これらは他の学部にも所属するテーマなので。だから1個にはしられないみたいな。

他学部のテーマも含め、幅広く学んでいたが、ゼミではジェンダーについて学んだという。

ゼミではジェンダー学、女性教育論みたいなことを研究していました。ジェンダー&セクシュアリティが自分の中の大きなテーマだったので。卒論のテーマは、LGBTQ 関連、セクシュアルマイノリティ関連にしました。

問：ジェンダーが自分の中のテーマだったのは何故ですか？

2010年代って、特に韓国のほうなんですけど、女性の大学生とか研究者とか普通の一般人も含めて、自分の生きづらさについてSNSで激しく発言し始めていて、フェミニズムに関する授業とか本とかに触れる人がすごく増えたんです。で、韓国に帰ったら、フェミニズムに関して知識とか情報とか持っている人がものすごく多くて。ほとんどの人が、自分が女性でありながら、フェミニズムに関して少しも触れないのはおかしいみたいな感覚になってたんです。それにびっくりして、で、そういう世の中の流れを見ると自分もやっぱ興味がわいてくるじゃないですか。そうしてミソジニーとかの概念を調べるうちに、お笑いの中にも確かにそれは存在してるなっていうのを感じて、だから自分の中でテーマになったんだと思います。

韓国での社会の動きと、自分のいるお笑いという業界を重ねた結果、ジェンダー論を研究のテーマにしたのだという。『早稲田ウィークリー』の記事でも、イさんはこう語っている。

日本で女芸人をしていると、時々困ることがあります。最近は女性であることを生かしたネタをしている芸人さんもいらっしゃいますが、女性を蔑視するようなネタが多かったり、女芸人はこうあるべきとか、女芸人は“女”を出したら駄目

とか、そういう偏見がたくさん存在していて、放送作家さんに直接言われたこともあります。お笑いや放送業界は男社会で、女性に対する偏見や差別が特に根強いと感じます。

ただ、この状況は日本だけではないという。続けて、韓国の事情についてもこう語る。

韓国でも同じです。韓国で活躍している芸人さんが「女のお笑いは面白くない、男芸人の方が面白い」と発言したときは本当に腹が立ちました。女芸人で、差別や偏見を感じたことのない人は、もしかしたらいないんじゃないでしょうか。

女性に対する偏見や差別、ミソジニーなど、現代社会の問題について語ったイさんだが、最後にこのように話した。

でも私が言いたいのは、だから女性がつらいとか、女性だけがっていうのはなくて、実際にそういう側面もあるからそういうのをどうすればいいのかとかを考えたんですよ。男とか女とかでわけて一方的に男はこうだよって非難したり、女はこうだよって言いたいわけではなくて。皆同じじゃなくて、考えが違って、一方的に非難してる人たちは一部じゃないですか。だからそれが全体の考えみたいになるのもおかしな話ですよ。

この考えは大学での学びからきているという。

フェミニズムの授業も受けたんですけど、その先生が言ってました。フェミニストだからってみんな同じ考えを持ってるわけではない。すごい過激な考えを持ってる人もいれば、そうではない人もいる。フェミニストの中でも考えが分けられていて当然なのに、ひとくくりにしてフェミニズムを悪だと捉えるのはおかしいと。

このように、イさんは興味を持つことに合わせて色々なテーマを選択し、大学での学びを充実させてきた。2019年4月には早稲田大学大学院に進学した。現在は、大学院を休学しているが、2023年には復学することを目標としているという。

## 2. 6 大学お笑い

大学生活を充実させるものとして、勉強のほかにもう1つ、サークルがあげられる。イさんは、早稲田大学に入学し、公認サークル「お笑い工房LUDO」に入った。

問：なぜお笑いサークルに入ったのですか？

(大学お笑いに対して) すごい興味があったので、入る前に話を聞いたり、ライブも見たりして、「大学生なのにこんなにネタできるなんてすごい。もしかしたら吉本で1番下のランクに所属している人たちよりできるんじゃない？」って思ったんですよ。「こういう人たちはどうやってこういうのをやっているんだろう」とか、めっちゃ興味あるじゃないですか。しかも当時私がサークルに入部しようか悩んでる時の新歓で、ブースにいたのがラパルフェっていうワタナベ(エンターテインメント)の芸人さんの尾身さんっていう方で、その方が私に説明してくれたんですよ。入ったらこういうことすとか。で、その内容が興味深かったんです。だから入ったんですよ。

サークルに入った理由はもう1つあったという。

あと私大学入るとき、ピンになってたので、本当は漫才やりたくて日本に来てたんですけど、ピンでネタするしかなくて、それも大学お笑いに入った理由でもあります。いろんな組み合わせで出れるっていうのを聞いて。

1年生の時は4つほどコンビを組んでみたそう。

1年生の時はまだよくわからないから、適当にこの中で誰かと組んでやるみたいな雰囲気だったんで、その時あいていた人たちと組んでやっていました。毎月ライブがあって、毎月同じ組み合わせで出てもいいし、違う組み合わせで出てもいいしという感じでした。

大学4年間所属はしていたが、たまに舞台に立つというような活動の仕方だったという。

入って4年間所属はしていたんですけど、実際活動は、他のめっちゃ参加していた人たちの10分の1くらいしかやってないと思います。それは、私がプロの芸人でなぜかサークルに入ったところをいじられて、そのいじりが芸人の間でもあるし、大学お笑いの方でもあるから、たぶんちょっとそれが耐え難いというのがあって。面白がってるけど、ちょっとがちで説教っぽいこと言ってくる

人も芸人の中にはいました。「お前なんでサークルなんか入ってるんだ、しょぼいな」みたいな雰囲気の人もいたんです。

また、プロの芸人時代とは異なる評価のされ方に戸惑ったという。

大学お笑いのネタみせの方法は、ネタを見せたらそこにいる全員が、スタッフ側の人も演者側の人も、その組に対してダメだしのシートみたいなを書くんですよ。大学1年生の時に、早稲田祭用のネタ見せをしたら、否定的なコメントばかり書かれたんです。その理由が韓国ネタばかりで、つまらないっていうか、なんか飽きた的なコメントが結構多かったんです。私はすでにプロやって、ここ（お笑いサークル）に入ってるじゃないですか。（プロの時は）作家さんとか周りの芸人とかに「どんどん韓国だしていけ」って言われてきたのに。NSC時代とか、私別に韓国だそうって思ってNSCに入ったわけじゃないので、韓国を出さないネタもしたんですよ。そしたら、作家さんに「韓国人なのに韓国ださないネタはちょっと、、」みたいに言われたから、やってきて、それで実際周りのプロの芸人さんの中でも（悪く）言われなかったの、だからむしろどんどん出して、それ（韓国ネタ）を面白く思ってくれる人ばっかだったんですけど、ここ（お笑いサークル）では逆のことを言われて。

さらに、否定的なコメントは特にスタッフ側から寄せられたことから、イさんはこう考えた。

スタッフ側って逆に考えれば、客席のお客さんと同じような立ち位置かもなんです。だから超否定された気になったので、「私はここに入ってネタを見せても、たぶん今後もそう言われることが多いんだろうな」って思ったから、行かなくなりました。

1年生の早稲田祭以降、サークルに参加しなくなっていったイさん。それでも辞めなかったのはサークルの仲間のおかげだという。

所属はしてるけど、辞めてはない状態だったんで、辞めるかどうかちょっと悩んでいたんです。今、ゼンモンキーというトリオを組んで活動している荻野っていう子がいるんですけど、その子と大学1年の最初のうち結構仲良くして、その子に「籍はおいてるけどずっと行ってないし、正直昔こういうことがあって色々悩むところがあってどうしようかな。やっぱ辞めた方がいいんじゃないかって思って」って話をしたら、その子が「いやウンちゃん（イさん）はサークルにいたら絶対もっと一緒にやれることあると思うし、辞めないでほしい」って

言ってくれたんです。

サークルで知り合い、以前コンビを組んだ仲間の存在もあったという。

サークルに入って2回目に組んだメロンメロンっていうコンビの相方にナメカタっていう子がいるんですよ。その子が、「ウンちゃんと一緒にネタやりたい」ってずっと言ってくれてたみたいなんです。1年以上たってるのに、ずっと言っていたみたいで。その時（コンビを組んでいた時）の感じがその子的に良かったのかわからないですけど、「一緒にやりたい」って前から言っていたそうで。そういうのもあって、結局2年の終わり頃に（サークルに）戻るんですね。たぶんそれなかったら、2年生くらいの時に辞めたかもです。

このように、大学のお笑いサークルという、これまでとは異なるフィールドでのお笑いも経験したイさん。評価のされ方などに戸惑いながらも、「コンビを組む」という来日の目的を、ここで出会った仲間と達成したのである。

## 第3章 韓国のお笑い事情と日韓の違い

この章では、イさんへの取材を通して判明した、韓国の現在のお笑い事情やと日韓のお笑いの違いを紹介していく。両国で活動経験のあるイさんだからこそその視点で話してくれた。

### 3. 1 韓国のテレビ番組

筆者は取材に先立ち、韓国人の友人に、韓国のお笑い事情について聞いていた。そこで、気になることを耳にした。なんと、現在、韓国ではお笑い番組が1つほどしかないというのだ。そこで、イさんにも質問してみた。

問：韓国にはお笑い番組が少ないのですか？

昔は、放送局ごとにネタ番組あったんですけど、人気がなくなりすぎて廃止になったんですよ、ほとんどの局が。で、今、韓国はケーブル（テレビ）がすごい強くて、みんな見るみたいな感じにはなってるので、『コメディビックリーグ』っていうネタ番組くらいしか残っていません。その番組は、もともと地上波の3社（MBC、KBS、SBS）とかの芸人だった人たちが、みんなこの番組に出ていました。しかし、数年前から、そこもその局の芸人さんを採用し始めているので、その人（ケーブルテレビ局の所属芸人）も出てるみたいな状況になってるんです。」

問：それでは、今は有名なお笑い番組というと、その『コメディビックリーグ』くらいですか？

はい。前はKBSの『ギャグコンサート』という番組がすごい強かったんですけど。あれは20年以上やって、段々人気がなくなって。結構ずっと人気だったんですけど、ある時期から本当に人気がなくなって、視聴率がとれなくなったから廃止になったんです。

人気はあったが視聴率がとれなくなるという流れは、日本のテレビ業界にもあるとイさんは言う。

日本のネタ番組もそういうの多いですね。『レッドカーペット』とか『あらびき団』とか『エンタの神様』とか、一時期すごい流行ったじゃないですか。で

も全部なくなっちゃったじゃないですか、一気に。似てると思うんですよ。数字がとれなくなったら終わるみたいなのは同じだと思います。

人気番組の視聴率が低下し、放送終了してしまうのは同じだが、韓国の方が問題が深刻だという。

日本は事務所ごとに所属する芸人がいて、他のバラエティー番組とかのオーディションにも行かせられるみたいな形が主流じゃないですか。でも韓国は、まず局の芸人にならないといけないという仕組みがあったのに、その局が持つお笑い番組がなくなるってなったら、芸人の活躍の場が本当になくなるっていう形になるんです。だから厄介ですよ。

韓国のテレビには、いまネタ番組やお笑い芸人ばかりが出演するバラエティー番組が非常に少ないことをあらためて確認することができた。また、視聴率の悪化に伴って人気番組が放送終了してしまうという状況は日韓で同じだが、韓国はその雇用形態の違いから、芸人にとってより厳しい状況を生み出していることがわかった。

### 3. 2 韓国の劇場

日本では、テレビなどのメディアに出演して活躍する芸人もいれば、劇場で観客の前でネタを披露することをメインに活躍する芸人もいます。もちろんこの2つを両立する芸人もいますが、テレビ出演をメインにするとネタを披露する機会は少なくなる場合が多い。そのため、劇場に立つことを大事にしている芸人もいます。韓国の劇場はどのようなのだろうか。

問：韓国の劇場では、どのようなネタが行われているのですか？

ユニットコントみたいのが多いです。でも最近の傾向だとスタンドアップコメディ的なのを自分のショーでやってる人が増えてるとは聞きました。スタッフアップコメディは20年前にもあったんですけど、たぶん一回りまたまわって、一周まわって、1人でマイクの前に立って笑わせるっていうのが、また来たのかもしれないです。

また、韓国の劇場では、比較的固定したメンバーが出演するそうだ。

韓国の劇場だと、結構決まってる芸人さんたちが出る形でやっています。出てる人たちは一緒ですから、やってる内容が毎日基本は一緒なんですよ。そこで思いついて「このネタやったら面白そう」「今日はこれぶっこもう」という感じで、1個とか何個かちょっと変わるのはあるんですけど。

問：韓国の劇場では、どのようなライブが行われているのですか？

劇場によっては、たまにテーマを決めてテーマに沿ったライブをしたりはするんですけど、でも基本的には〇〇ショーみたいに決めて、その中で出てる人も一緒だから、その人が試したい違うネタをできたらそれ（内容）を入れ替えるとかはあっても、形は同じです。だから、一か月前に見に行ったら、一か月後に行ったら、同じようなライブやってる可能性があるんですよ。

このような劇場のシステムは、日本とは異なるそうだ。

日本は事務所ごとに所属してる芸人が多いから、ライブごとに（出演者の）組み合わせを変えてるじゃないですか。全部違うし、事前に全部告知しています。ホームページとかで「この日はこの人とこの人のこういうライブ」とか。あと、日本はライブの種類が多いんです。トークライブ、コーナーライブ、コントだけのネタライブとか、漫才だけのネタライブとか。

日本には、韓国にはない劇場のシステムもあるという。

日本は劇場のシステムで、まだ売れてない人はノルマ制、チケットノルマがあるんです。例えば、この公演に出るためには3枚のチケットを売らなければいけない。で、1枚1500円だったら4500円先にチケットを買い取って、その分チケットを売ってくださいって会社から言われるんですね。で、そういうノルマ制になってるライブはほとんど出演料もないんですよ。そうなったら4500円分まず先に買い取らなきゃいけないで、4500円分もしお客さんにチケットが売れなかったらマイナス4500円。プラス交通費も。だからお金を払って劇場に出てるっていう現象ですよ。

ただ、そのチケットノルマも、名前が売れていくとなくなるという。

日本の場合は名前が売れてるとノルマとかないと思うんです。ノルマないし、逆に出演料が少しでももらえるから、劇場だけで売れてる人は生活できたりする仕組みになってるんだと思うんですよ。だから下のランクの人が負担する仕組みなんです。

イさんはこのノルマ制を知らずに日本にやってきたため、はじめは驚いたそう。というのも、韓国では劇場に所属している芸人に対しては保障があるからだ。

韓国の劇場も給料はないとしても、ご飯の保障とかはあるんですよ。劇場に出演したら、1日1食は無料で食べられるみたいな。(劇場が)この食堂と連携してて、ここに行って料理言って食べたいもの食べられるみたいな仕組みがあります。食券をくれて。で、1公演だったら1食、3公演だったら2~3食たべてもいいみたいな。

イさんが韓国の劇場に所属していた頃は、次のような仕組みだったという。

私の時代は2004年とか昔なので、劇場に入って間もない普通の志望生は、交通費として月10万ウォン(日本円約1万円)をもらって、食事は出してもらえないみたいな。でも劇場に契約できるくらい実力があるってなって、契約したら月50万ウォンとか100万ウォンくらいはあげるみたいな、もちろん食事は別で。で、この食事が別っていうのが結構大きかったと思うんですよ。

現在は、さらに給料や保障が充実している劇場もあるそうだ。

今は割と給料をくれるみたいで、劇場によっては、地方からあがってきた人が住めるマンションを提供してくれるところもあるんです。私の知り合いの、劇場を運営されている芸人さんは、100万ウォンくらいの給料と食券と寝るところ、というかマンション、みんなで住める宿舎を提供してるって言ってました。

韓国にも、劇場に出演し続けている芸人はいるという。テレビのネタ番組が非常に少ない韓国において、劇場は芸人の活動の場の大きな1つになっていることがわかる。また、日本と韓国の劇場を比較してみると、給料や食事、住居の保障といった芸人への処遇、またライブのスタイルなどの違いがあることがわかった。

### 3. 3 韓国のお笑い芸人の活躍の場

テレビのネタ番組は1つしかなく、劇場も決まった芸人しか出られないとなると、韓国の芸人はどこで活動しているのだろうか。この点について質問してみた。

問：韓国のお笑い芸人は活動の場が限られていると感じましたが、どこで活動しているのですか？

今は劇場に所属してネタをやるか、ほとんどの人が YouTuber になったって聞きました。YouTuber になってドッキリ系をすごい撮ってるって聞いています。ドッキリは人気で、特に一般人にドッキリをするのが人気です。

問：具体的にはどのようなドッキリですか？

例えば、飲食店で、変な人っていう設定で2人でコント、コントじゃないけど日常コントみたいな感じで、本当にリアルに見せるんですよ。日本だと芸人同士でそれをやって載せるんだと思うんです。それがレインボーとかスクールゾーンとか。ほとんどの芸人さんがその形のあるあるコントみたいなのを、YouTube にのせるじゃないですか。それを一般人の前でやるんです。で、一般人はドッキリだと思わずに見るんですよ。見て「何やってんだ」みたいな。たぶんお店の許可はとってると思うんですけど、大声とか出すと、この人たち（一般人）が反応するじゃないですか。それを撮って載せるみたいな形を、芸人さんめっちゃやって。

またネタ番組は少ないが、他のテレビ番組で活躍する芸人もいるという。

バラエティー番組とかに出たり、レポーターをやったり、他のことすることも、事務所さえうまく入れればできるんですね。だから、昔『ギャグコンサート』に出てた私の友達も、別に仕事がんがんやっていますし、ユ・ジェソクさんという芸人さんは、有名なMC としていろんな番組に出ています。だから、ネタ番組以外でも活躍の場はあります。

その一方、イさんは新人の芸人の活躍の場について危惧している。

昔から（芸人を）やっていて、ある程度テレビに出た人は別に心配じゃないんです。ネタとかちゃんと披露したり、その時の人脈があるので。でも、今の新しい志望生は出づらそうだと思います。

なぜなら、以前であれば、テレビで活躍するためのルートがあったからだという。

前は、KBS の芸人になって2年間 KBS にいて、でも2年過ぎても KBS 『ギャグコンサート』に出てた人は、あとからでも、10年目とかでも出れるんですけど。うちの局の人だみたいな印象になってるんですよ。フリーになって事務所所属になっても、いったん（局に入ると）なると。だから『ギャグコンサート』にずっと出続けたりするんですけど。それがその芸人の肩書きみたいになるから、そこで売れて肩書きになって他のバラエティー番組、いろんな放送局で仕事をすってというのが今までのルートでした。

しかし、『ギャグコンサート』が終了してしまった現在、そのルートは途絶えてしまっている。そのため、新人にはチャンスがこないという。

新しく出ていく人が、まず最初にネタを披露する場が少なくなったっていうのが現状なんですよ。だから志望生が目指すところが少ないなっていうのはあります。

『ギャグコンサート』は新人がネタを披露する絶好の場であったため、昔は出演することが芸人たちの目標だったという。

昔は『ギャグコンサート』に出るのがみんな目標だったんですよ。20年以上続いた番組ですからそりゃあ目標になるんですけど、終わってしまったので本当に何を目指すんですかね。私もそれ気になります。でも芸人さんとかに聞いた話だと、やっぱ YouTube とかをやってるみたいなのが多かったり。

このように、韓国のお笑い芸人が活躍する場は、時代とともに変化してきている。なかでも人気長寿番組『ギャグコンサート』の放送終了は大きな契機になったことがわかる。活躍の場を失った芸人たちが YouTube 界に進出していることや、新人がネタを披露し世間に知られる機会がなくなってきていることなど、韓国のお笑い事情の今が見えた。

### 3. 4 お笑いのジャンル数

日本にはお笑いの種類が多い。では、韓国はどのようなのだろうか。韓国と日本の両国で活動経験のあるイさんにお話を聞いてみた。

問：韓国では漫才という形が主流ではないということは、韓国にボケとツッコミという概念はあるのですか？

ボケとツッコミは日本の概念だと思います。でもボケってというのは、面白いことをやるってというのは全部ボケじゃないですか。だから他の国でもボケってというのは名前は違うだけで、あるとは思いますが。ただ、ツッコミは漫才っていう形をつくる時に、ボケをやってる人に何かを言う、ちゃちゃを言うみたいな人が必要になったからつくった、いわば新しい概念。

イさんによると、日本は「名付ける」というところが特徴だという。

日本は1個1個に名前をつけますね。ツッコミのようなことをする人は韓国でもぶっちゃけいます。ずっといます。いるんですけど、この行為についてツッコミって名前をつけるかと言ったらつけません。その差はあります。だから私は「韓国にツッコミはないよ」って言ってるんですけど、でもこれはツッコミっていう行為をしてる人がいないって意味ではなくて、その概念がないって意味を言ってるだけなんですよね。結構みんな勘違いして、「え、ツッコミあるでしょ？」みたいに言う韓国人もいるんですけど、でも概念だけでいったら別になくはない？って思います。

この特徴は「日本はお笑いの種類が多い」と感じる理由と関係する。

日本は、お笑いのものをジャンル化するっていう印象があります。漫才、コント、ピンネタ、フリップネタ、大喜利、新喜劇、物ボケなど、ジャンルとしてありますよね。1個1個お笑いの形を、こういう形があるっていうのをすごい強調する仕組みだになっていうのは思います。もしかしたら韓国でも同じようなことをやってる人はいるかも知れませんが、1個1個ジャンル化はしてない気がするんです。一発芸も日本だとジャンルになってるじゃないですか。で、ものまね。まあものまねは韓国もあるのはあるけど、ジャンル化はしてないなって。別に韓国も同じようなのはずっとやってたんだとは思いますが、1個1個それを表現できる言葉はないのかなって。結構この差は大きいなと思います。

また、イさんによれば、日本はお笑いの業界用語が一般人にも知れ渡っている点も特有であるようだ。

例えばフリとボケに関しては、韓国でもフリとボケを表す言葉は別にあります。ただ、芸人だけの用語で、一般人は知らないんですよ。そこがまた違うんですよね。日本の場合は、フリとかボケとかツッコミとか別に一般の人でも知ってるでしょ？だから結構概念化してると思います。そういうお笑いの用語を全部みんな知ってますよね？そこが結構違うのかもしれないです。

これらの日本の特徴は、お笑いコンテストの多さにも関係するという。

日本だと、コントとかピンとか漫才とか歌ネタとかものまねとか、全部ジャンル化してないですか。だから大会がしやすい、生まれやすいんだと思います。

確かに、日本にはお笑いのジャンルごとに有名なコンテストが存在する。例えば、漫才であれば『M-1グランプリ』、コントであれば『キングオブコント』、ピンネタであれば『R-1グランプリ』、ものまねであれば『ものまね王座決定戦』、女性芸人であれば『女芸人No.1決定戦 THE W』というようにである。

一方、韓国にはお笑いコンテストはほぼないようだ。その理由について、イさんはこのように話す。

韓国ではお笑いをジャンル化してないから、いろんな種類全部を1個にくくって、お笑い。韓国では、「お笑い」のことを「ギャグ」っていうんですけど。（1つにまとめて）ギャグっていうふうにしてるから、（大会が）生まれにくいんだと思います。

このように、韓国側の視点も持つイさんにお話を聞くことで、韓国にはない日本固有の特徴が見えてきた。日本大は、お笑いの種類や行為、役割など1つ1つに名前を付けることや、その名前が一般の社会でも共有されていることが、韓国と比較した場合、特徴的であることがわかる。

### 3. 5 観客の違い

観客の反応や笑うポイントは、日本と韓国で異なるのか。筆者が、ぜひ伊さんに聞いてみたいと思っていたことの1つである。なぜなら、両国の観客の前でネタを披露したことのある伊さんにしかわからないことがあると思ったからだ。

問：日本と韓国で観客の反応に違いはありますか？

日本は割と観客が静かですよね。まあ笑う時は笑うんですけど、全体的な雰囲気でしたら、おとなしい、静かな感じではあります。韓国だと、出囃子<sup>7</sup>とかブリッジ<sup>8</sup>の時から「フッフッフッフ」みたいな感じで、みんな盛り上げようみたいな雰囲気になってるんですよ。だからお笑いのポイントでも「HAHAHAHA」みたいな感じで分かりやすく笑ってくれます。日本は別にそうじゃないですよ。おとなしい方だと思います。

このような観客の反応の違いは、お笑いに限ったことではないと伊さんはいう。

これは別にお笑いに限らず、韓国の K-POP とか見ても分かると思うんですけど、掛け声の文化があったり、すごい自分たちから盛り上げようみたいな、なにかやるみたいな雰囲気があるんですよ。日本は、この人のやってることを静かに見ようみたいな。だから、日本のアーティストが、韓国で公演をした時に、（観客が）歌を全部一緒に歌ってくれるとかで、びっくりしたっていうじゃないですか。日本人たちはおとなしく見てくれて、韓国の人たちは（アーティストが）歌ったら一緒に歌って楽しむみたいな。文化の差はあると思います。

問：日本と韓国、両方でウケるネタはなにかありますか？

リズム系のネタとか、体をはる系のネタとかコントは、言語とかが分からなくてもウケやすいから、同じポイントでウケやすいと思います。例えば、韓国のアイドルも PPAP のネタを結構真似してやりましたし、アンジャッシュさんや陣内さんのネタは、韓国でも一時期はやってました。字幕付きでも理解できるので。あと COWCOW さんのあたりまえ体操みたいなものとか。ああいうのは外国人が見やすいですよ。

---

<sup>7</sup> 寄席で、芸人が高座に上がる時に演奏する囃子。現代のお笑いにおいて使う場合は、芸人が舞台に登場する際にかかるテーマソングのこと。

<sup>8</sup> ショートコントや漫談などの連続した短いネタの間にはさむ言葉や動作。

一方、言葉や文化で笑わせる漫才などは、外国人には逆に伝わりづらいという。

精密な言葉を使ったネタは、やっぱ言葉の細かいとことか文化とかが分からないとウケにくいと思います。なので、漫才とかは、日本に住んでる外国人でも、お笑い好きとか、普段からネタ見てますとか、文化とかにも興味ありますっていう人とかじゃないと、漫才みて「何が面白い?」「え?どういうこと?」って言うてる外国人も多いです。

しかし、笑いのツボは、国ではなく人によって違う。どこを面白いと感じるかは、人それぞれであるという。

正直、私でもわからないこともあります。別に聞き取れないからわからないんじゃないくて、文化のなんかない「どこがポイント?」みたいな。でもこれは日本人同士でも起きることだとは思うので、みんなツボが同じではないから。

韓国と日本のお笑いを経験してきたイさんに今後の目標を尋ねてみた。

できれば世界的に有名になりたいなと思っています。だから今 TikTok で他の国の人でも見れるような形のものを作って、後輩を巻き込んで、9人くらいのメンバーでつくってやってるんです。最初そういうこと（他の国の人も見れるようなもの）をやりたいて言ったのも私で、そういうことを世界規模でできる風になるといいなと。あと、今コロナで厳しいですけど、国際コメディ・フェスティバルみたいなのところに出たいって言うのはあります。」

このように、日本と韓国の観客の違いから、その国民性や文化が見えてきた。比較のおとなしく静かに見守る日本と、一緒に盛り上げる文化が根付いている韓国。反応の違いはあるとしても、両国でウケるネタもあると分かった。コントやリズムネタ、体を使ったネタなど、視覚的にわかりやすいものは国境を超えることができるようだ。

一方で、言語や文化を理解していることが前提となるネタは、どうしても外国人には難しい。しかし、同じ国のなかであっても、言葉を理解していたとしても、伝わらない場合もあるという。笑いのツボというのは、国によるというよりも、人によるということである。

また、日韓両国で活動してきたイさんは、今後、他の国の人でも笑わせていきたいと考えているという。笑いが国境を超えることを知っているイさんだからこそその目標であろう。

## 第4章 まとめ

ここまで、イさんの半生を紹介するとともに、インタビューを通して見えてきた韓国のお笑い事情や、お笑いという観点から韓国と日本の違いをまとめてきた。

人を笑わせることが仕事であるお笑い芸人。同じ職業であっても、日本と韓国では異なる点があることがわかった。お笑い芸人のなり方や主流のお笑いスタイル、活動の場などあらゆるところに違いがあり、興味深かった。特に、日本特有の、お笑いのジャンルや役割1つ1つに名付けるという特徴は、全く予想していなかったことである。筆者は、このジャンル化するという日本文化に感謝しなければならない。なぜなら、ジャンル化によって生まれた数々のお笑いコンテストに、楽しませてもらっているからだ。韓国の新人芸人は、ネタを世の中に披露する機会がなく、難しい状況であると聞いた。この1つ1つに名前を付けるという文化は、彼らを救う方法の1つになるのではないかと思う。言語化は、社会の理解を広めるのを助ける。お笑いの用語が一般人にとっても身近なものになることが、まず韓国には必要なかもしれない。

また、韓国と日本の両方で活動してきたイさんにお話を聞いたことは、この論文にとっても、筆者のゼミ活動の集大成としても貴重な経験だった。イさんの経歴を聞くと、もともと暗い性格だったとは思えないほどに、行動的である。取材の事前調査をしていたとき、イさんの座右の銘を知った。

노력하는 사람만이 원하는 것을 얻는다.

「努力した人だけが欲しいものを得る」という意味の韓国語である。イさんは中学生の時からこの言葉を座右の銘にして、「欲しいものを手に入れるためにはまず行動しなければならない」という精神を大事にしているようだ。取材中、お話を聞きながら、筆者はこの言葉を思い出し、行動的なイさんの心の源になっているのだと納得した。

そんなイさんを動かしたのは、いつでもお笑いだったように思える。暗い性格だったイさんが人前に出る仕事を選んだのも、お笑いライブに出演する芸人を見て憧れたからだった。日本にやってきたのも、日本のお笑いを見たからで、日本語を勉強しはじめたのも、日本で漫才がしたいと思ったからだった。

イさんは現在、相方のたなか茜さんと「すまいる JK」というコンビを組んでいる。JKとは Japan と Korea の頭文字だそう。日本人と韓国人の2人で smile を届けるという意味を持っているという。2人は日本にとどまらず、世界に smile を届けている。イさんが声をかけて集めたという、韓国好きの日本人の芸人メンバーとの TikTok<sup>9</sup>では、韓国にまつわるネタ動画を、英語字幕を付けて配信している。中には800万回以上再生された動画もあり、2022年1月現在、フォロワーは8万人以上にのぼる。世界的に有名になるとい

---

<sup>9</sup> 吉本興業所属の、韓国が好き芸人がしている「K-OMEDY」という TikTok アカウント。

う次なる目標に向かって進んでいるイさんの今後のご活躍が、筆者自身非常に楽しみである。

## 参考文献

- ①吉本興業株式会社、“NSC 学院紹介”、<https://nsc.yoshimoto.co.jp/about/>、2022年1月15日閲覧
- ②M-1 グランプリ 公式サイト、“エントリー情報”、<https://www.m-1gp.com/entry/>、2022年1月15日閲覧
- ③YouTube、“【韓国人】Youは何しに日本へ？韓国人の私が11年前に日本に来た理由！【ウンちゃんねる】【イ・ウンジ】 / 일본 거주 11 년차 한국인이 일본 유학 이유!!”、2020年1月16日公開、<https://www.youtube.com/watch?v=wkYjJR696Uc&feature=youtu.be>、2022年1月15日閲覧
- ④早稲田ウィークリー、“よしもと芸人イ・ウンジ 日本のお笑いにある「ミソジニー」について研究したい”、<https://www.waseda.jp/inst/weekly/attention/2017/10/10/33425/>、2022年2月1日閲覧
- ⑤韓流 MPOST、“【連載】芸人イ・ウンジの『노·사·원·얼 (ノサウォノツ) ~韓流MCへの道~』第1回~記念すべき第1回！『노·사·원·얼 (ノサウォノツ)』とは？”、2019年7月1日作成、<https://mpost.tv/nosawoneot190701/>、2022年1月19日閲覧